

漫画研究に向けて

信時哲郎

大学院に在籍している頃、指導教授だった村松定孝先生から近代文学研究の草創期の話を聞くことがあった。近代文学を研究することは当然だと思っていたが、先生によれば、それはつい最近始まったばかりのもので、一般に認知してもらうまでには多くの苦勞が、そして草創期ならではの楽しさもたくさんあったとのことである。

かくして先達の後を承けて近代文学を大学で講じているわけだが、最近は戦後の日本漫画史も扱うようになった。単に漫画を紹介するだけでなく、授業中に漫画を描かせてみたりもしている。

「日本の大学もついにここまで来たか」という嘆きの声が聞こえてきそうだが、自分ではちよつと取りかかるのが遅すぎたなと反省している。例えば漫画の祭典「コミック・マーケット」(コミケ)には、毎年、五十万人ほどの参加者がある。ここに並ぶ作品の文学性が必ずしも高くないにしても、もはやここまで飛達した領域を「日本文学史」に含めないでいることは難しいのではないかと思っているからだ。

おそらく近代文学研究の草創期も状況は似ていたと思う。当分の間は、苦勞を強いられることになるだろうが、草創期ならではの楽しみを満喫したいと思っている。